

本学の小児看護学実習における受け持ち小児の治療処置と看護学生の看護経験の変化

宮下 弘子¹・宮原 春美¹・山崎真紀子¹・佐々木規子²

要 旨 本学の小児看護学病棟実習において、学生が受け持つ小児の看護処置内容にどのような変化が見られているのかを知る目的で、小児看護学実習の状況を分析した。平成10年度と平成14年度の小児病棟実習において学生が受け持った小児を疾患別、治療処置別に集計し比較した。その結果、疾患においては、平成10年度では学生が受け持つ小児の疾患に比較的広がりが見られたのに対し、平成14年度では腫瘍性疾患と腎疾患で8割を超えていた。治療処置では、いずれの年度でも経口与薬が最も多く、次いで持続点滴であったが、その他の治療処置は平成14年度では非常に限局していた。

長崎大学医学部保健学科紀要 16(2): 73-76, 2003

Key Words : 小児看護学実習, 治療処置, 看護技術

はじめに

少子化、医療情勢の変化にともない、入院治療を必要とする小児の状況が変化してきている。小児看護学の病棟実習で学生が受け持つ小児の状況にも変化が見られるように思う。卒業時における看護実践能力の向上が求められているが、育成の場として重要な意味をもつ看護学実習の現場において、学生が受け持つ小児の看護処置内容にどのような変化が見られているのか、本学の小児看護学実習の状況を分析し、卒業時における看護実践能力向上のための資料とすることを目的に本調査を行うこととした。

研究方法

対 象：平成10年度と平成14年度に大学病院小児病棟において小児看護学実習を実施した際に受け持った小児の看護情報を分析対象とした。データ集計には、当該年度において使用した、受け持ち予定小児の情報を要約した「受け持ち小児一覧」と、実習終了日に行う看護報告会で使用した受け持ち小児の看護計画表を用いた。

分析方法：平成10年度と平成14年度の小児看護学実習(病棟実習)において学生が受け持った小児について疾患別、治療処置別に集計し、比較した。

結 果

1) 受け持ち小児の背景(表1, 表2)

性別では、平成14年度の受け持ち小児において男児が多い傾向にあったが、年齢別ではいずれの年度も乳幼児、学童前期、学童後期の各発達段階にほぼ均等に分散していた。

表1. 受け持ち小児の年齢

	平成10年度	平成14年度
乳児(1歳未満)	4	2
年少幼児(4歳未満)	16	20
年長幼児(6歳未満)	8	17
学童(低学年)	26	9
学童(中学年)	10	8
学童(高学年)	8	2
中学生以上	10	18
計	82	76

表2. 受け持ち小児の性別

	平成10年度	平成14年度
男 児	48	59
女 児	34	17
計	82	76

2) 疾患別比較(図1)

受け持ち小児決定にあたっての基準として次の4点を臨床指導者に提示しているが、この基準はいずれの年度においても変わっていない。すなわち、①重症でないこと、②家族の受け入れがよいこと、③精神疾患または精神的な問題が顕在している事例は避ける、④実習期間中入院している可能性が高いこと(4日間でも可)、の4点である。

平成10年度においては、腫瘍性疾患が最も多く30人(36.6%)であったが、次いで循環器疾患が13人(15.9

1 長崎大学医学部保健学科

2 信州大学大学院医学研究科

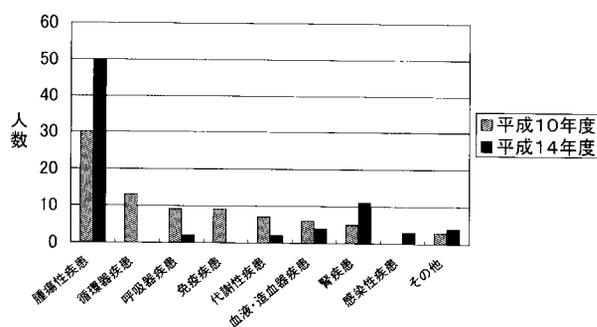


図1. 受け持ち小児の疾患

%), 呼吸器疾患, 免疫疾患がそれぞれ9人 (11.0%), 代謝性疾患が7名 (8.5%) 等, 学生が受け持つ小児の疾患に比較的広がりがみられた。

平成14年度においては, 腫瘍性疾患が最も多かったが, その数は50人 (65.8%) と半数を超えており, 腎疾患の11人 (14.5%) をあわせると8割を超えていた。それ以外は, 少数ずつ種々の疾患に分散していた。

3) 治療処置別比較 (表3)

表3. 実習期間中に受け持った小児に実施された治療・処置

	人数 (%)	
	平成10年度 (N=82)	平成14年度 (N=76)
経口与薬	61(74.4)	69(90.8)
坐薬	7(8.5)	0
皮下注射	6(7.3)	2(2.6)
点滴 (末梢)	37(45.1)	27(35.5)
点滴 (中心)	7(8.5)	26(34.2)
吸入	26(31.7)	47(61.8)
酸素療法	3(3.7)	0
吸引	4(4.9)	0
経管栄養	0	1(1.3)
採血 (血糖測定)	6(7.3)	2(2.6)
骨髓穿刺	0	1(1.3)
腰椎穿刺	2(2.4)	1(1.3)
留置カテーテル	0	8(10.5)
浣腸	5(6.1)	0

いずれの年度も経口与薬が最も多く, 特に平成14年度においては経口与薬を必要とする受け持ち小児は9割を超えていた。点滴は末梢と中心静脈をあわせると経口与薬に次いで多くの小児が必要とする処置であった。特徴的なのは, 平成10年度においては中心静脈に挿入している点滴が8.5%であったのが, 平成14年度においては34.2%と約4倍になっており, 反対に末梢点滴は平成10年度より平成14年度のほうが減少傾向であった。また吸入を必要とする小児は平成10年度では31.7%であったの

が, 平成14年度では61.8%になっていた。その他では, 平成10年度では坐薬挿入や皮下注射, 浣腸, 血糖測定が数例ずつあったものが, 平成14年度ではそれらの処置はあっても1~2例であり, 結果的には受け持ち小児を通して経験できる治療処置は非常に限局してきているといえる。

考 察

小児看護学実習の中の病棟実習は, 全国的にも短縮化の傾向があり, 2001年の飯村らの調査¹⁾では, 4年制大学34校の調査結果で病棟実習は6~9日であったと報告している。また首都圏の3年課程の看護学校30校を対象とした斉藤らの調査²⁾では, 主たる受け持ち患児の受け持ち日数は平均8.5日であったとしている。本医療短大の小児看護学実習では, 小児病棟における実習を5日間で実施している。短期間の実習ではあるが, それでも上記で示した①~④の基準を考慮すると, 受け持ちの5日間を通して入院している可能性の高い小児を選定するのは次第に困難な状況になっている。その結果として受け持つ小児の疾患の偏りと, 受け持ち小児に実施されている治療・処置内容が経口与薬, 持続点滴, 吸入に集中する傾向につながっていると推測される。

飯村らが1991年に行った調査³⁾で, 小児病棟婦長が新卒看護婦に期待する小児看護技術の到達度は, 吉田らが⁴⁾同様の調査を行った1975年に比べ, かなり低くなっていたと報告しており, 50%以上の婦長が「できなければならない」とした治療処置に関する技術は, MRSAの患児のケア後の十分な手洗いと, 点滴の準備, 滴数調整, 輸液の終了時刻がわかること, 幼児への蓄尿の指導, 採取した髄液の無菌的な取り扱いのみであった。しかしながら, 大学における看護実践能力の育成の充実が望まれている現在, 小児看護学領域で望まれる看護実践能力をあらためて検討しなおし, 講義・実習方法についても再考する必要があると考える。

おわりに

今回の調査で本学の小児看護学実習で受け持ち小児に実施されている比率の高かった項目については, 講義, 学内演習から効果的な継続ができるよう考慮するとともに, 小児看護特有の配慮を必要とする項目でありながら, 実習場面で遭遇することの少なくなった項目については, 学内演習の方法の工夫や実習方法の再検討等で, 卒業時における看護実践能力の向上に向けて検討を加えていきたい。

引用文献

- 1) 飯村直子, 伊藤久美, 江本リナ, 安田恵美子, 阿部さとみ, 長田暁子, 込山洋美, 筒井真優美, 渡部真奈美, 福地麻貴子, 小村三千代: 看護系大学における小児看護学実習の概要. 日本小児看護学会誌

10(2) 16-21, 2001.

- 2) 齊藤ゆかり, 濱中喜代, 吉武香代子, 齊藤禮子: 小児看護実習における受持患児の実態. その1 どのような患児を受持っているか. 看護基礎教育の中の小児看護学の教育内容・方法に関する総合的研究 平成5・6・7年度文部省科学研究費補助金(一般研究C) 成果報告書 pp52-56. 1996.
- 3) 飯村節子, 吉武香代子, 西元勝子, 上野美代子: 小児病棟婦長が新卒看護婦に期待する小児看護技術の到達度に関する研究. 看護基礎教育の中の小児看護学の教育内容・方法に関する総合的研究 平成5・6・7年度文部省科学研究費補助金(一般研究C) 成果報告書 pp30-39. 1996.

宮下 弘子 他

What changes occurs on the students' experience
at the child nursing practice in our college

Hiroko MIYASHITA¹, Harumi MIYAHARA¹,
Makiko YAMASAKI¹, Noriko SASAKI²

- 1 Department of Nursing, Nagasaki University School of Health Sciences
- 2 Shinshu University Graduate School of Medicine